

2019 年 5 月 12 日（日）「破壊の目的」

マタイ 24:1-2

1 イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。2 そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょう。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」

【序論】

今日は「エルサレム神殿崩落の預言」という記事を扱います。もしかしたら、先日 4 月 15 日に起きたパリのノートルダム大聖堂の大規模火災を思い浮かべる方がいらっしゃるかも知れませんが、（あくまでも時事として）触れさせていただきます。1163 年から建造が始まり、850 年以上の歴史を持つ文化遺産が、恐らく誰かの小さな不注意によって、瞬く間に一部が失われてしまいました。1789 年のフランス革命をはじめとし、幾度も戦火を乗り越えてきた壮麗なる大聖堂がこういう形で姿を変えてしまうのは残念です。人の手によって作られたものの脆さ、危うさを思わされる出来事でありました。

【本論】

さて、今日からマタイ 24 章に入っていきますが、この章は全体として世の終わりの出来事について語られています。「審き」というテーマが扱われていると言ってもよいでしょう。あるいは、主イエスの再臨の時に起きる出来事とも言える。そのことが、第一世紀に起きたエルサレム神殿崩落という出来事との関わりの中で教えられているのです。読者はある種の混乱を覚える。どこまでが第一世紀の出来事で、どこからが世の終わりの出来事なのか。「神殿」が象徴している幅広い意味を考えつつ、今日のテキストに取り組んでいきたいと思います。

本論 1. 神の栄光が去る

イエスが宮を出て行かれるとき、弟子たちが近寄って来て、イエスに宮の建物をさし示した。（24:1）

23 章では律法学者・パリサイ人を厳しく糾弾する主イエスの姿がありました。そのや

りとりは神殿の中でなされていた。外面的な形ばかりで、内実を失ったイスラエルの宗教。祭司による儀礼は麗々しく行なわれているが、そこにはまことの信仰がない。神殿の中では商売が繁盛しているが、そのせいで異邦人の礼拝が妨げられている。神殿は神の民全体の霊性の縮図と言ってもよいでしょう。つまり、主イエスはイスラエルに信仰を見ることができなかったのです。神殿に神が来られた。神の御住まいである神殿に、神の子が到来したのです。しかし、主はご自分を迎える備えのまったくできていない現状を目の当たりにされた。

「宮を出て行かれる」とさりげなく言われていますが、これは神が神殿を去られる様子を象徴的に言い表している。神の栄光が去る。旧約時代にも同じことがありました。

主の栄光はその町の真ん中から上って、町の東にある山の上にとどまった。

(エゼキエル 11:23)

墮落した神殿に神は住み続けることができない。そして、このエゼキエル書では、主の栄光が（去って）「町の東にある山の上にとどまった」と続いています。この山はどうもオリーブ山を指しているようでして、この後、主イエスが向かわれる山と一致している。主イエスも恐らく意図的に行動しておられたのでしょう。旧約聖書をよく知っているユダヤ人には、主の行動にピンとくるものがあつたはずです。

以前にもふれましたが、主イエスの時代の神殿は「第三神殿」と呼ばれるものです。ダビデの時代に考案され、ソロモンによって建てられたのが「第一神殿(ソロモン神殿)」。

民は、この神殿こそ神の臨在されるところと、建物を絶対化しました。その神殿で仕える祭司は、神の御心を預かり、民に伝える人々と見られていたのです。祭司は神殿において、罪を犯した民のためにとりなしの祈りをささげ、赦しを得るために犠牲をささげました。当初、良い目的で始められた神殿祭儀も、時間とともに内実を失っていく。時の権力者と結びつき、神殿内で偶像礼拝が横行する。不正が蔓延り、賄賂が行き交う。このように、宗教的にもはや意味をなさなくなった神殿は、紀元前 587 年に大国バビロンの襲来によって破壊されました。これは預言者たちが繰り返し予告・警告していたことです。この「神殿の破壊」という出来事には、墮落した宗教のきよめという意味が隠されている。神は形だけの礼拝を忌み嫌われ、いつでもそのような礼拝(場所)を投げ棄てることができになるのです。

70 年に及ぶバビロン捕囚が終わり、祖国に帰還した民は、神の示しによって神殿を再建していきます。この時に中心となって民を導いたのがゼルバベルという人物でした。民は神殿よりも自分たちの住まいを建てることに夢中になっていたもので、そのことでも叱責を受けます。様々な障害を乗り越え、紀元前 516 年、ついに「第二神殿(ゼルバベル神殿)」が完成しました。この神殿は、その後 480 年存続したものの、やはり紀元前

37 年に破壊されてしまいます。神殿の破壊は常に宗教の墮落と結び付いている。

その後、紀元前20年にヘロデ大王が再び再建工事に着手し、修復・増築を始めました。その修築の大部分は10年で完成し、献堂式が行なわれましたが、追加工事の後にも続き、完成の日の目を見るのは紀元64年になります。ヘロデの神殿再建の目的は、純粋にイスラエル宗教のためを思っていることではありません。自身がエドム人であり、ユダヤ人からの支持を得られないがゆえに、彼らが最も大切にしている神殿を再建することで心を掴もうとしたのです。そのために、彼は極めて立派な神殿を構想しました。「ヘロデの神殿を見たことのない人は、美しい建造物を見たと言ってはならない」（ヨセフス『ユダヤ戦記』5:5:6、6:4:8）と言われるほど。外庭の東側にある「美しの門」は、金箔が貼られ、朝日に燦然と輝き、参拝者に感動を与えました。

私は写真やテレビでしか見たことがないのですが、伊勢神宮の壮大さ、その行き届いた管理は、異教の建造物とはいえ驚くべきものです。日本人は大きな神社を参拝するときに、やはり特別な思いになるのでしょうか。それと似ていると思います。主イエスの弟子たちはガリラヤの田舎出身の者ばかりでしたから、まるでお上りさんのように、この神殿に見入ったのでした。マルコの並行記事では、弟子たちが「先生。これはまあ、何とみごとな石でしょう。何とすばらしい建物でしょう」（マルコ13:1）と叫んだとある。それもそのはず。この神殿のために用いられていた石は、長さ12m／高さ4m／幅6mの大理石であったというのですから（ヨセフス『古代誌』15:11:3）。しかし、主イエスの返答は彼らの予想もしないものでした。

本論2. 神殿崩落が象徴する事柄

そこで、イエスは彼らに答えて言われた。「このすべての物に目をみはっているのでしょう。まことに、あなたがたに告げます。ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません。」（24:2）

「目をみはっているのでしょう」と訳された部分は、原文では「（これらすべてを）見ないのか」という呼びかけになっています。ニュアンスとしては「お前たち、見とれている場合ではないぞ」といったところでしょう。「ここでは、石がくずされずに、積まれたまま残ることは決してありません」と訳された部分は、「οὐ μὴ」という二重否定が二度も使われている極めて強い否定文です。主イエスは旧約預言者と同じことを言っているのです。

それゆえ、シオンは、あなたがたのために、畑のように耕され、エルサレムは廃墟となり、この宮の山は森の丘となる。（ミカ3:12／エレミヤ7:12-14、26:1-19も参照）

預言者ミカもエレミヤも神殿の崩壊を預言しました。そして、その預言を冒瀆と見なす

人々によって迫害されました。主イエスも裁判の席で神殿崩落の預言を取り上げられ、訴えられています。

「わたしは人の手で造られたこの神殿を壊し、人の手で造られたのではない別の神殿を三日で建てる」とこの人が言うのを、私たちは聞きました。（マルコ14:58）

さて、この告発者の言葉を読むと、主イエスの言われた「神殿崩落」には幾つかの意味が含まれていることが予想できるでしょう。私は新約聖書全体から三つの意味を見出しました。

第一に、主イエスは文字通り、紀元 70 年に起きるローマ帝国による神殿破壊のことを言っておられると思われます。ヘロデ神殿が完成したのは紀元 64 年。その 2 年後の 66 年にユダヤ人はローマ帝国に反乱を興し、「ユダヤ戦争」が勃発しました。この戦争の発端は、カイザリヤにおけるユダヤ人殺害だったと言われています。当時のユダヤ属州総督フロルスがエルサレムのインフラ整備のための資金として神殿の宝物を持ち出したことに怒った過激派グループが暴動を起こしたのです。この戦争は血みどろの戦闘を経て、73 年に終わりました。「70 年、ユダヤ人たちは神殿やアントニウス要塞に拠って頑強に抵抗したが、圧倒的なローマ軍の前に敗北し、エルサレム神殿は…火を放たれて炎上し、エルサレムは陥落した」¹。この出来事は、主イエスの預言によるならば、墮落した神殿宗教の終わりを意味していました。

第二に、神殿破壊とは、主イエスが十字架上で殺害されることを暗示しているでしょう。先に引用したマルコ 14:58 の「わたしは人の手で造られたこの神殿を壊し、人の手で造られたのではない別の神殿を三日で建てる」という言葉は、まさしく十字架で命を捨て、三日の後に甦る主イエスご自身を表している。そもそも神殿とは何であったか。イスラエルの真ん中に神が臨在されることを具現化した建物、それが神殿というものだったはず。「インマヌエル」（神共にいます）が目に見える形で民に示されていたのが、神殿の意味するところだったのです。しかし、インマヌエルは主イエスによって完全な形で成就してしまった。主イエスが受肉した神として世に来られた。これは、形ある神殿に取って替えられるものとして、神がついに世に来られたことを意味したのです。その意味で、形ある神殿は壊される必要があった。そのことを主はご自分のからだをもって実現されたのです。それが十字架と復活の意味でありました。

第三に、神殿とは（より実存的に）私たちがこの人生において頼みとしているものと言うことができるでしょう。私たちが自分の力でこの人生を築き上げてきたと思っているもの。口にしなくとも、実は依り頼んでいるものすべてであります。それは、地位、業績、財産といったものかも知れません。私たちは知らず知らずのうちに人生の石を積

¹ Wikipedia「ユダヤ戦争」参照

み上げ、「神殿」を築き上げている。しかし、もしそれらを自分の「助け」「支え」と呼ぶのであれば、その神殿は壊されなくてはならないでしょう。私たちがこの人生を終える時、この世で築き上げたものは何一つ神の前に持って行くことはできないのです。「地に築く宝を棄つるは易し」（聖歌 496 番）と歌うとき、私はどこか困難を覚えます。それは、自分が人生の宝としている多くのものを手放すことが、如何に難しいことであるかを知っているからです。そして、何かゾッとするものを覚える。自分が神以上に大切にしているものが数多くあるのではないか。それはいつしか自分にとって「神殿」となっているのではないか。私たちが地上の宝を棄てるべき時とはいつであるか、以前にそんなお話をしたことがあります。それは、もう必要ないと思った時であろうと。私たちの地上の神殿が決定的に崩れる時が来ます。それは、私たちの人生の終わりです。その時には、私たちは完全に自分という存在を神に明け渡し、永遠をお委ねしなくてはならない。しかし、私たちの人生の「神殿」は、生きている間に建て直していただくことができるのです。それは、私たちが「自分のもの」として握りしめてきたこの人生（神殿）を、主イエスの死とともに葬り、神に向きを変えた人生に甦ることです。この人生の方向転換は、私たちの永遠を決定づけ、私たちの生き方そのものを根本的に変えるものです。

【結論】

何事も「破壊される」ということは痛みを伴うことです。犠牲が払われます。その「神殿」が立派であればあるほど、崩されたときの悲しみは言い知れぬものがあるでしょう。しかし、真の神殿が築き上げられるためには、古い神殿は崩されなくてはなりません。イスラエルにとってエルサレム神殿が崩されることは、真の神殿としての主イエスを中心に据えるために必要な過程でした。事実、主の死と復活をとおして真の信仰者が生まれました。主イエスは（聖霊によって）信者一人一人にとっての神殿となり、また信じる者をご自分の神殿としてくださるのです（I コリント 3:16、エペソ 2:21-22）。私たちが人生の拠り所としてきたものは崩され、今や「主イエス」という新しい神殿が築かれているのです。

【祈り】

人の人生の目的であられる神よ。私たちがこれまで拠り所としてきたものとは何でしょうか。それは、手で作った「神殿」に譬えられると思います。もしそれがあなたとの関係を妨げているのであれば、憐れみによって取り除いてください。そして、主イエスというまことの神殿を私たちの心に打ち立ててください。この世のものは廃れます。しかし、あなたとの関係は永遠に続くからです。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
礼拝としての意義を失った、建物としての神殿を、惜しみなく壊し給う、父なる神の愛。
十字架の死と復活により、イスラエルに、また信じる者の心に、まことの神殿を打ち立て給いし、主イエス・キリストの恵み。
人生の頼みとしているものを見直し、神と自分との関係に最大の価値を見出させ給う、
聖霊の親しき交わりが、
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。